

縄文時代後、晩期の集落

草原孝典

【講座の概要】

縄文時代は、近年の発掘調査の成果によって最もイメージが変わった時代の 1 つといえます。それまでは、飢餓に苦しみ、病気に苦しむ苦難の時代と思われがちでした。ところが、青森県の三内丸山遺跡などの大集落の様子が明らかとなり、豊かな自然の恵みを享受し、クリの管理さえもおこなう発達した社会であったと考えられるようになりました。また、縄文時代にも農耕が存在していたと考える人も多くなり、豊かな縄文社会というイメージが広がってきています。

では、縄文時代の人々は、定住生活を行い、周囲の環境を人為的に手を加えるまでにいたっていたのでしょうか。今回の講座では、中部瀬戸内の集落遺跡を眺めてみて、定住というキーワードに沿って検討してみたいと思います。

西日本における縄文時代の集落遺跡は、東日本と比べると大変少なく、しかも内容が貧弱ですが、それでも発掘調査例が増加してきており、集落遺跡の性格を追求するための資料が蓄積されてきています。とくに岡山県下の集落例を見てみますと、縄文時代後期では、長縄手遺跡で竪穴住居が 3 軒もまとまっており、津島岡大遺跡でもやや粗ですが竪穴住居が複数みつかっています。本格的な集落が営まれていたことを知ることができます。ただし、その一方で、竪穴住居がなく、小さなピットのみが広がる集落遺跡もあります。晩期になっても同じ傾向で、後期と晩期はかなり似た時代であったといえます。集落遺跡の構成要素を分解してみると、竪穴住居、小ピット、貯蔵穴、火所、土壇となります。これらの組み合わせによって集落を分類することができます。すべてがそろっている集落、貯蔵穴が欠落している集落、貯蔵穴と竪穴住居が欠落している集落です。

集落遺跡の構成から、少し視点を変え、出土する遺物について見てみます。様々な石器のうち、狩猟に使用された石鏃と根茎類の採集に使用された石鋏の比率を見てみます。県北山間部の集落では石鏃 1 点に対して石鋏が 2 本以上となります。県南部の集落では石鋏が 0.04 ほどです。実に 50 倍以上の差が認められます。環境に適応し、一定の地域性を有する集落が成立していたのでしょうか。しかしながら、土器の形はほとんど同じです。地域性は認められません。そうしますと、集落遺跡の形態差は、細かな地域ごとに様々な集落を営んでいたのではなく、環境に合わせて様々な形態で集落を営んでいたと推測され、定住する安定した集落であったとは思えないのです。

【参考文献】

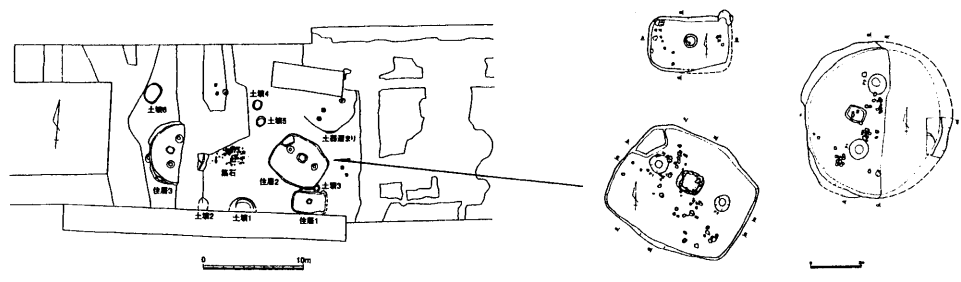
泉拓良 2002 年「縄文文化論」『日本の時代史 倭国誕生』吉川弘文館

13,000 年前	旧石器時代			
	縄文時代草創期		縄文時代晩期	弥生時代後期
10,000 年前	縄文時代早期	2,500 年前	弥生時代前期	1,700 年前
6,000 年前	縄文時代前期		弥生時代中期	1,500 年前
5,000 年前	縄文時代中期	2,000 年前	弥生時代後期	1,400 年前
4,000 年前	縄文時代後期	1,700 年前	古墳時代前期	
3,000 年前	縄文時代晩期			
2,500 年前	弥生時代			

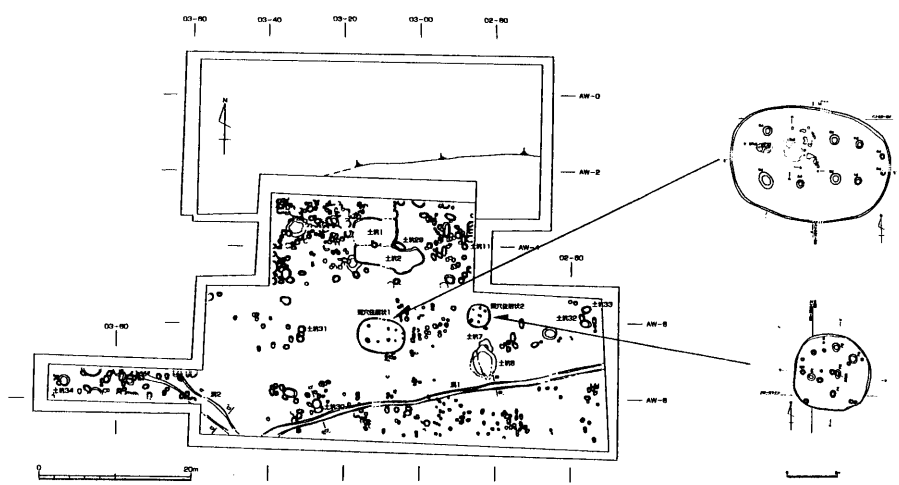
[1,000 年単位]

[250 年単位]

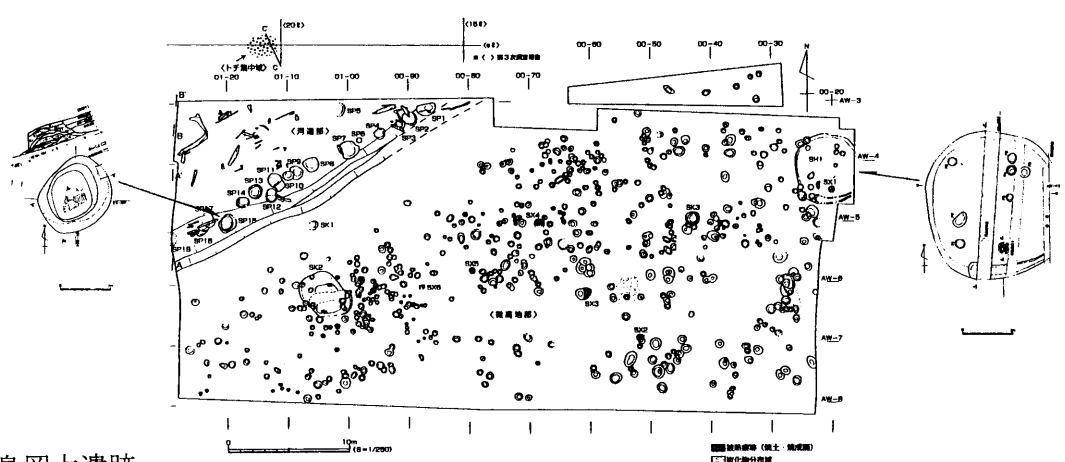
[150 年単位]



長縄手遺跡



津島岡大遺跡

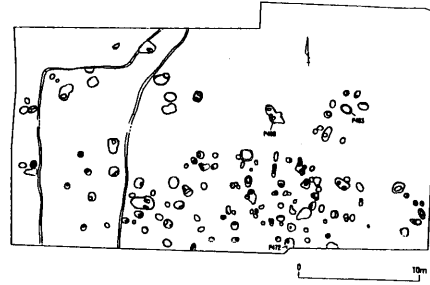


津島岡大遺跡

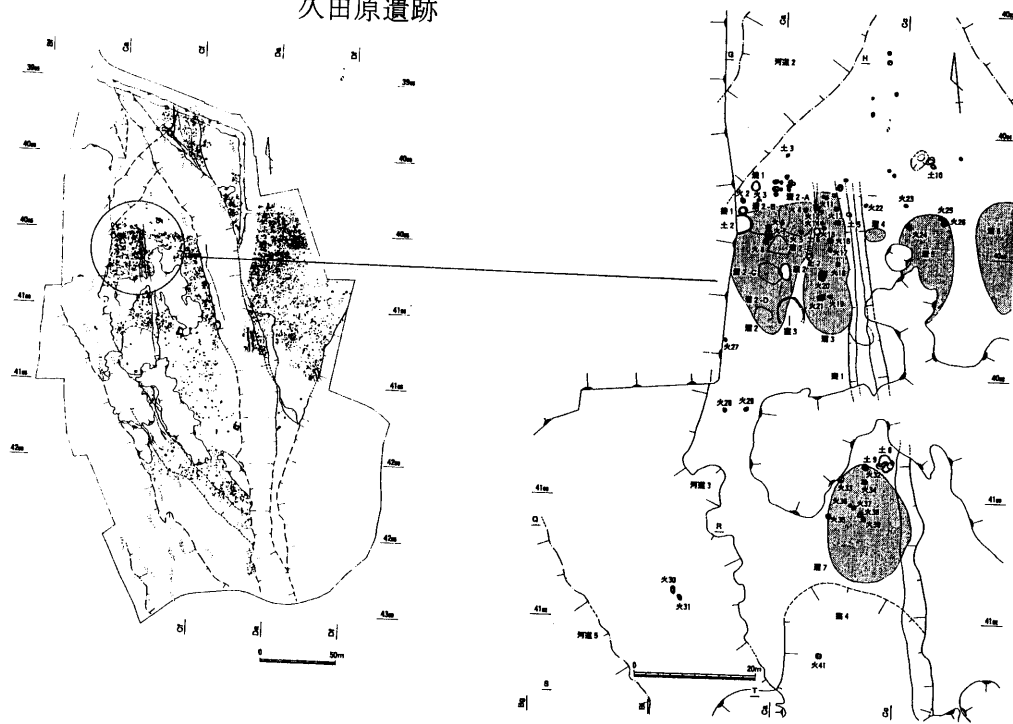
図1 縄文時代後期の集落



久田原遺跡



津島江道遺跡



久田堀ノ内遺跡

図2 縄文時代後、晩期の集落

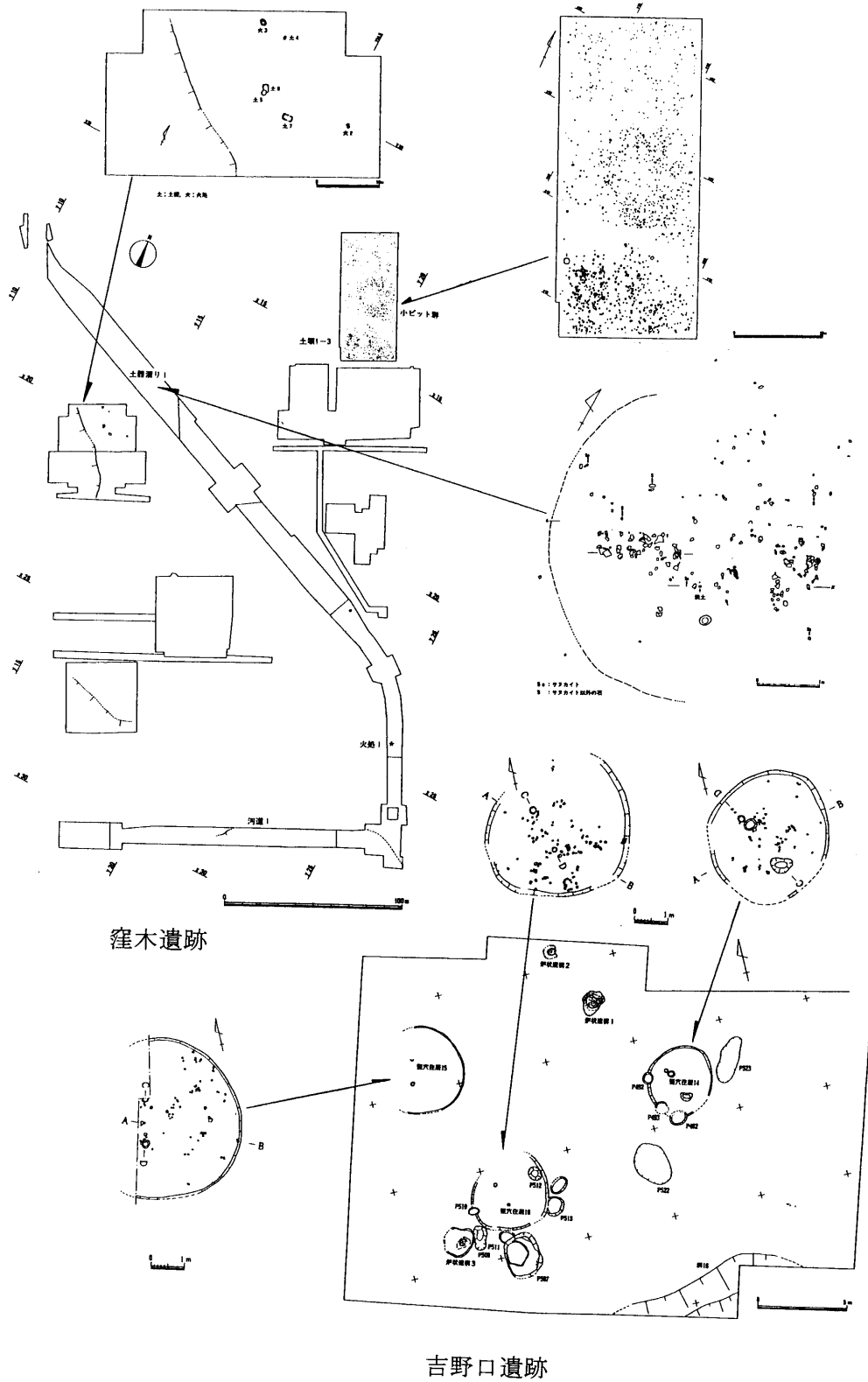
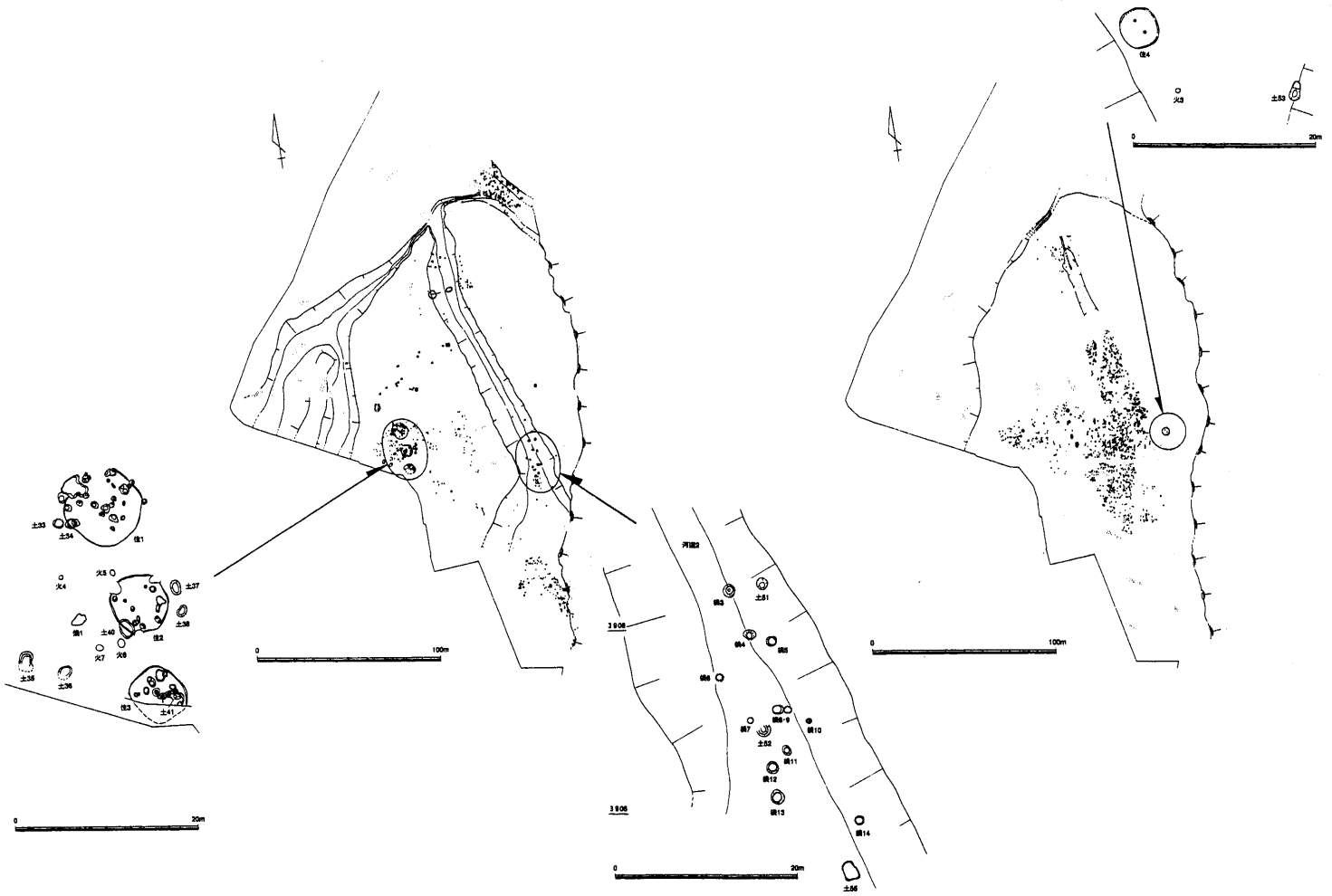


図3 縄文時代晩期の集落



久田原遺跡

図4 縄文時代晩期の集落

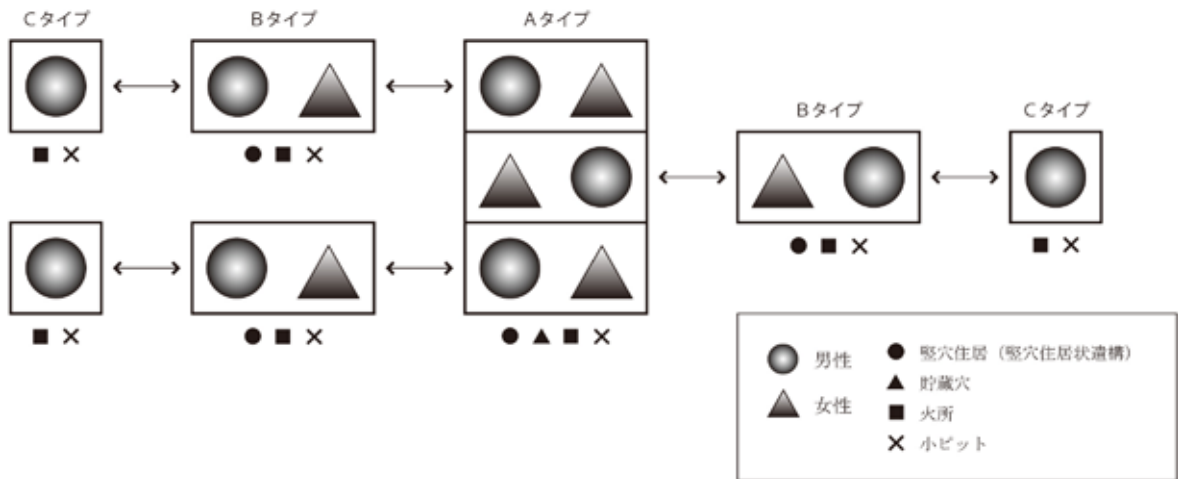
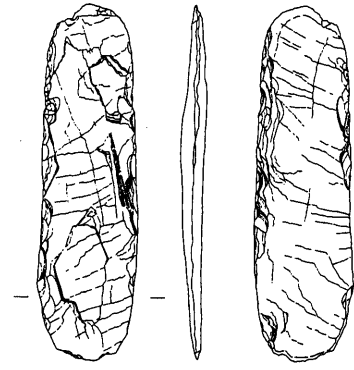
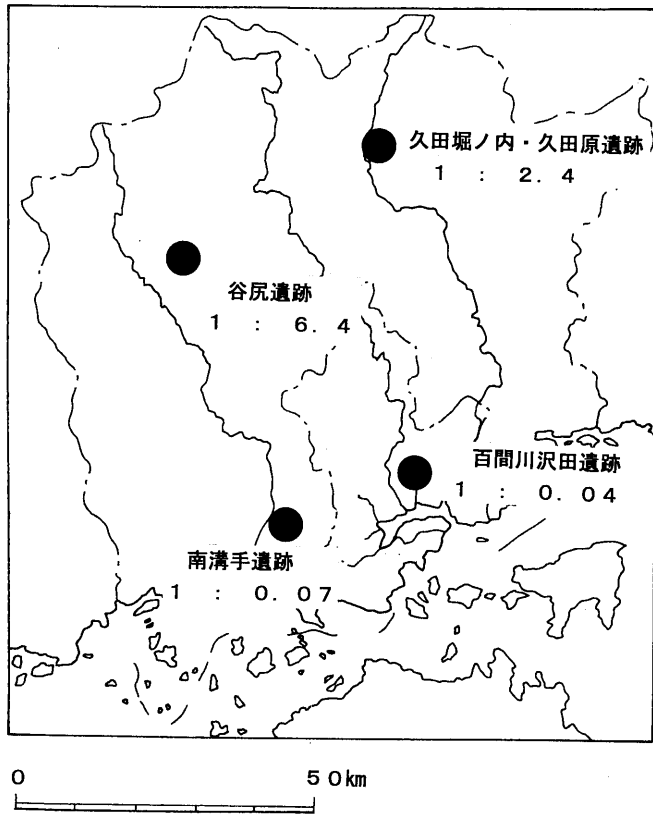


図5 縄文時代後、晩期の集落概念図



石鍬



石鏃

図6 石鏃と石鍬の比率

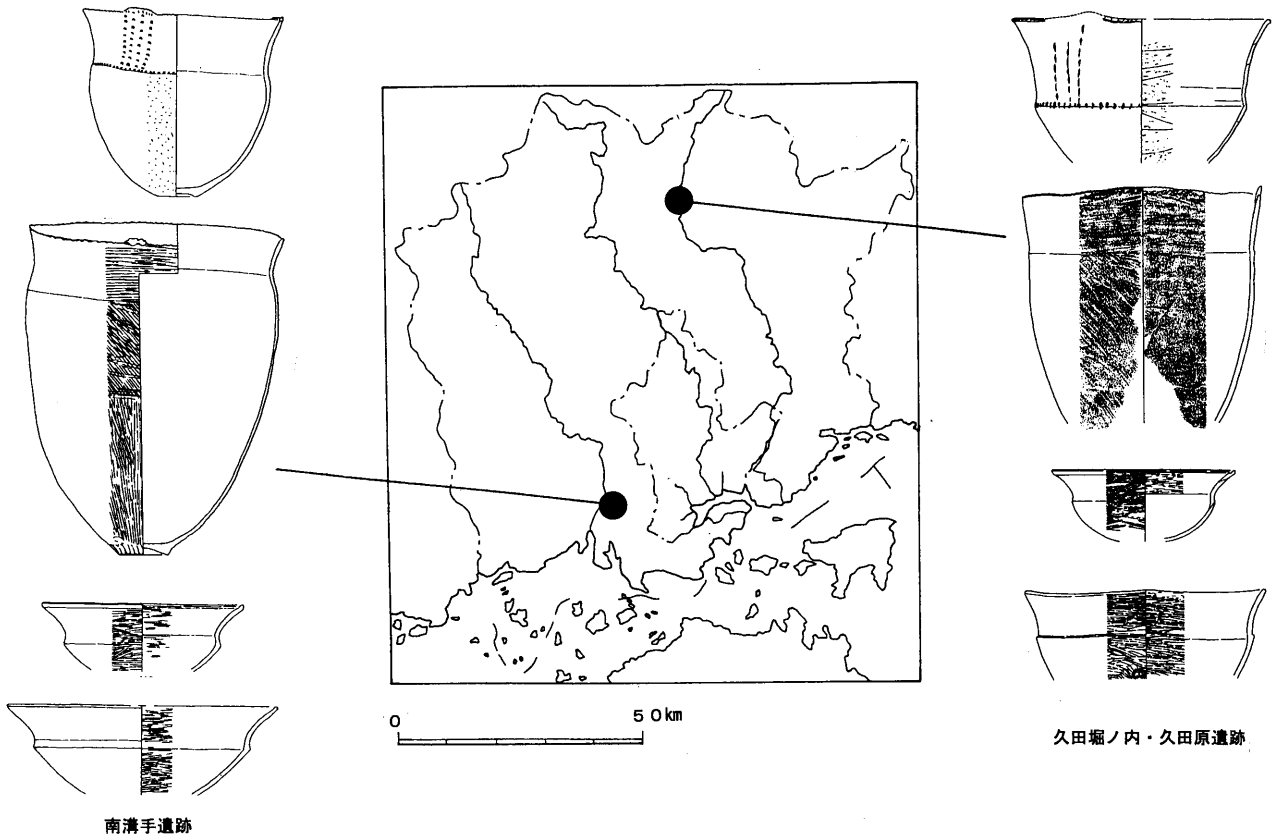


図7 縄文時代晩期中葉の土器